

掌篇

リメイク版

30枚書き下ろし

平成十七年六月十九日改題修正版

400字詰原稿用紙 30枚書き下ろし

時じき藤

たなか踏基

守屋山は、下諏訪町の北西部にある標高850メートル余りの山である。諏訪湖を挟んで南側の守屋山麓に上社があり、北側に下社があった。上社はそれぞれ本宮（諏訪市神宮寺）と前宮（茅野市安国寺）、下社は秋宮（下諏訪町上久保）、春宮（同町大門）に分かれていた。

諏訪大社は、上社が建御名方命たけみかたのみこと、下社が八坂刀売命やさかたのめことと息子と母の祭神を祀っていることでも知られている。

全国的に支社を有する本宮の諏訪大社といえ、まず御柱祭に触れねばならない。御柱祭は、七年目ごとの寅と申の年に行われる。出雲大社の大黒柱、伊勢神宮の心柱、諏訪の御柱が日本三大奇祭と言われている。

「式年造営御柱大祭」は信濃国あげての最大規模の祭り、起源は約千二百年前の平安時代まで遡る。上社と下社に分かれ、夫々四月に山出し祭、五月に里曳き祭が行われる。上社は八ヶ岳・御小屋山の大社社有林から、下社は霧ヶ峰に近

い下諏訪町東俣国有林から、いずれも直径四尺ある縦の巨木を切り出して曳く。四つの社の幣拝殿、宝殿を中心とした社の四方、正面に一之、二之御柱を、裏手に三之、四之御柱が建立される。

ついでながらこの下社秋宮の三之御柱は、堀新田町の曳子がひいた御柱で、山出しの最も危険な「木落とし」で平尾郷の二人の若い曳子が六十五石の御柱の下敷きになり、圧死したという因縁付の御柱であった。昔から、この曳衆が縦の巨木に跨り一機に坂を下る「木落とし」は、御柱祭の最大の呼物で、諏訪地方の血気盛んな若者や祭り好きの壮年曳衆の心を躍らせる光景であった。毎年死傷者や怪我人が続発し、逸話も絶えなかつたが、怪我は地元の曳子にとつて不名誉とされた。

目通り八尺二寸長さ十二間という太さからして当然、下社秋宮の神社正面に相応しく、二之御柱として充分過ぎる程の御柱だった。この血を吸った因縁の御柱

の地面から三間程の高さに、くつきりと血痕が残つたと伝えられるが、今ではその痕跡も見当たらない。人間二人の死傷事件のため格下げとなり、三之御柱として神社裏手に曳立てられた。死傷という不名誉の格下げを、堀新田町の曳子が残念がったことは言うまでもない。こうした出来事を面白可笑しく口伝する者が、亡くなつた今では、そうした土地の逸話もすっかり風化してしまつたようだ。

守屋山の中腹の上社本宮と、それより東側よりの平地の下社秋宮の距離は、半里余りであった。上社の境内にある展望台から、下社の森は容易に見下ろせた。下社から上社に行くには、昭和十六年に完成した堀新田町へ通ずる新道を利用した方が交通の便は良かったのだが、急峻な石段を登つても行かれた。新道とは、迂回するならかなバス道で、守屋山入口の停留所でバスに乗ると、次が下社前で、次が上社前であった。

下社には二つの社があり、四月十五日の春宮祭、十月十五日の秋宮祭と年二回の例祭が行われた。夫々の社を春宮、秋宮と人々は呼んでいた。古くは、例祭になると猪鹿の頭七十五頭を俎に載せて、神殿に供えられたと伝えられ、その神事の名残として、木の猪鹿の頭をそれぞれ一つずつ大きな杉の俎に載せ神殿に供える

儀式が今でも現存している。

急峻な石段は下社裏手の奥まった三之御柱の根本から始まっていた。石段の登り口に、苔生した鳥居と祠があつた。少し離れて櫂の巨木があり、祠の傍に小さな藤棚があつた。櫂の巨木に压倒され、隠れるようにひっそりとしていたため、地元の人達ですら、石段下の藤棚に気付く者は殆どいなかった。

この藤は、華やかな長い花房こそないが天然自生の若い山藤だつた。しかし、約5分四方に広がる小さな藤棚の下に入ると、命を育む若い鼓動が聞こえてくるようだった。

黒澤平助は、被っていた麦藁帽子をとり、天を仰ぎながらシャツのボタンを外すと、ばたばたと胸に風を入れて一息ついた。風が微かにあつた。微かな風であつたがこの石段で十分もいたら、汗がひくような気がした。石段を登つてから、ここが略下社と上社の中間と思われるあたりに、巨大な綾杉があつた。神功皇后が剣の鋒と杖を埋め、その上に御鎧の袖に挟まれていた杉の葉を地面に挿して目印としたものから根を生じ、巨木となつたものだという。

石段の登り口で、鳥居を潜り五十段も

行くと、そこで石段が途切れて赤いばらばらとした砂道がしばらく続いた。さらに30分も登れば、苔の付着した石段が再び現れるという風に、所々途切れ途切りの状態で上社まで続いた。でも、昔はこの石段は途切れることなくずーと上まで続いていたら違いない。老樹木が枝を交えて、鬱蒼とした影を落とす光景は夏には涼味万点だが、春秋にはそれが返つて一抹の寂寥感を与えていた。

冬には、枝からどさどさと音を立てて落下する雪の音が聞こえ、夏には麦藁帽子を被つた土地の子供達が捕虫網を持って行き来した。

平助は背負っていたリュックを下ろして、石段の途切れたあたりで小休止した。眼を上げるとペタリと夏が貼り付いて来た。高い杉の葉末が夏の空を切り刻んだ。天界の愛に導かれて、蝉の声が降つてきた。微かな風が、蝉の声を干渉させて其処だけ「ワァーン」と唸っていた。

石段と平行する小川の急な流れがあつた。平助は地下足袋を脱いで、小川の縁に腰を下ろして足を浸した。汗とほこりでねばつこい足の指の股が生き返つた。重い米を背負ってきた疲労感がすーと抜けて行く快感だつた。痺れるような快感が、指の股から足首にまでじんと伝わって、やがて大腿から内股にまで這い登つ

てきた。

平助は腰の手拭で水滴を拭つて地下足袋を履き直すと、リュックを背負つて再び石段を登り始めた。登りながら、額をこしこしと手で擦つた。擦つたところから、黒い垢がこぼれ落ちた。垢は生きている自分の証なのだ。でもこの垢は額の垢なのだろうか、手の垢なのだろうか。皮膚を擦るところして死んだ細胞がこぼれるのが不思議でならない。

急に風が止んでしまったかと思つた。汗が、これでは一寸も蒸発しやしないじゃないか。風が止むとやはり暑い。汗は、これでも蒸発しているのだろうか。風の神様、一寸ばかり吹かしてくれよ。山の風ソヨリ、森の風ソヨリとね。

時折、思い出した風が、身体の深い内部から吹き出物のように表面に湧いて出た汗を、首から腕から、おでこから鼻から、運び去つて行った。でも、これっぽちのお涙風じゃ、心地良いとまでいかないんでね。風の神様、山の風ソヨリ、森の風ソヨリですよ。平助は、山の風ソヨリ、森の風ソヨリと口の中で、繰り返しながら調子を付けて登つた。リュックの中の五升の米が揺れた。

平助は、妙にかん高い喚声を耳にしたように思った。それは「ウワー」でもければ「キャー」でもない。獣じみた叫び

にも聞こえるし、生まれたての赤子が泣いている様にも聞こえた。一人の音が聞こえてきたと思うと、次には大勢して怒鳴っているようでもあった。思うに昔、インドか何処かで捕まったという狼少年は、きつとこんな奇声を発しながら山野を駆けていたのかもしれない。金属的な響きかと思うと、人なつっこい趣もある。平助の視界の中に、やがて小さくそれについて強い緋色が入ってきた。

石段の上方に緋の袴を付けた巫女だと思つた。平助はその声の主が、発狂しているのではないかと疑つた。ひどく烈しく、不安定で不安で、危険な光景に平助は眼を凝らした。燃えるような緋の鮮やかさに、平助は狼狽した。その素晴らしき緋色は、素早く動き一瞬たりとも止つていかなかった。ふらふらと左右に動いたかと思うと、次の瞬間にはもう前後に動いていた。

平助は極度の近眼だった。眼鏡を掛けて来なかったことを後悔した。自分の視力が恨めしかった。発狂した巫女を目撃するという、劇的な場面の目撃者になれるかもしれないと思つたからだ。平助は、今にも緋色の袴に足を纏れさせながら、石段から転げ落ちてくる巫女を待った。それは、子供達の一団だった。他は全部白いランニングシャツを着ているのに、

その不思議な子だけが全身真赤だった。

その男の子の赤が、大勢の白を圧倒して際立っていた。お手製の真赤なシャツを着て、これまた同じ生地の短いパンツを穿いていた。顔立ちも、洗練された都会風の面立ちで、髪の毛は幾分カールして、混血ではないかと思うほど色白の美しい男の子だった。白いランニングの子供達は、明らかに土地の田舎の悪童どもで、てんでに赤服の男の子を弄りながら、囃したてていた。その喚声が、空中を突き抜けて、緑の木々の間に木霊を作つて甲高く反響していたのだった。

上方に位置する赤服の男の子の方を振り仰ぐと、悪餓鬼どもは立止まつて手でメガホンを作りながら下方から一斉に叫ぶ。

「赤、赤、赤ちゃん、赤ん坊！」

「赤、赤、赤ちゃん」とやっておいて

「赤ん坊」

と引つ張つて、更にそれを二三回呼ぶ。

「ほら、悔しいか。」

「悔しかったらここまで来い！」

その時、突然赤服の男の子が泣き出したのかと思つた。その声が、金属音に変わつて悪餓鬼どもの頭上を突如襲つた。

「キヤーン キー！ オーヒヤー」

その気合とも呪文ともつかぬ奇声に、

悪餓鬼どもは、くるりと背を向けて一目散に駆け下つてきた。もう安全と思われ所まで立止まると連呼した。

「赤、赤、赤ちゃん、赤ん坊！」

「悔しかったから此処まで来い！」

「泣きたいかーほら、泣いてみる！」

多勢に無勢で明らかに形勢不利にも拘らず赤服の男の子は、決して怯まなかつた。怯むどころか口をきつと結び、小さな握り拳で威嚇した。都会つ子の線の細さは微塵もなく、一人で大勢に対峙する剣幕に、怯んだのはむしろ田舎の子供達だった。

「キヤーン キー！ オーヒヤー」

赤服の男の子の尋常でない気迫が、彼等を凌駕したからだ。男の子のある種の妖気が、彼等をして恐怖を抱かせたのかもしれない。集団でなくては対抗し得ない、不可思議な靈気を漂わせていたからだ。その奇妙な金属的な奇声もさることながら、何といつても全身赤づくめの服からして、西洋の小悪魔の化身のような不安感を醸し出していたからだ。

悪餓鬼どもは、今度は何も言わずに駆け下りてくると、突然他人の出現に気付いて一様に警戒の色を浮かべた。平助のリユック姿に気付かなかつた一人が、仲間間に小突付かれると、探るような目付きで平助をみて照れた。

「赤 赤 赤・・・」

彼等はそれほど、赤服の妖怪に集中していた。平助を男の子の新手の庇護者と勘違いしたのか、悪餓鬼どもが一瞬たじろいだ。

「どうしたんだ！」

平助は、彼等の警戒心を解く精一杯の笑い顔で問いかけた。

「キヤーン キー！ オーヒヤー」

赤服の男の子は、つられて足を止めたが、怯んだ悪餓鬼めがけて一気に突っ込んで行つた。それは行者の唱える奇妙な呪文のようにも聞こえた。田舎の悪童は、弾かれたようにもう駆けに駆けた。その男の子の奇妙な呪文に、一瞬身裡に悪寒が走り、それが鳥肌のように皮膚の表面に飛び出して小さなぶつぶつを作るのを平助は意識した。

赤服の男の子は、平助の真横をいっさんに駆け下つた。大きな赤い襟の広がり、ことさらはつきりと見えた。猖狂熱の疫病神が、翼を生やして真一文字に飛んで行つた。膝小僧丸出しの赤いパンツの男の子は、さながら獲物を狙い、風切つて舞い下りる緋色の鷹であった。その後姿を見送りながら、小さな怪物の世界から蘇つたかの如く平助は「ほー」と息を吐いた。

下社秋宮の例祭には、青柴を大きく積上げて船を擬した輿を作り、緋と紫の衣をまとつた祭神、おおくにぬしのみこと 大國主命妃、やさかたのめのみこと 八坂刀売命の人形を、丈夫な藤の蔓で括つてこの柴船に乗せ、これを土地の若者が裸で担ぎ三度神地を廻つてから、この石段を勢いよく駆け上がつて上社本宮に入る神事があつた。このお祭りは「お船祭り」とも「裸祭り」ともいわれていた。

これは、八坂刀売命と、御子の建御名方命の舟遊びを模したもので、青柴は水を意味した魔除であつた。神事は、下社の祭神やさかたのめのみこと 八坂刀売命が、上社本宮の祭神である建御名方命のもとに逢いにいく、即ち母が出世した我子を一年に一度表敬訪問する仕構になつていた。藤蔓と言へば、古墳時代には、石棺を木櫃に載せて藤の蔓で曳いた記録もあると言つが、実際「御柱祭」の御柱を曳く場合にも、丈夫なこの地方の山藤の蔓が使われていた。昔は八坂刀売命やさかたのめのみことの人形が着る、緋と紫の衣装は毎年選ばれた四人の少女が丹精込めて縫い上げる慣わしであつた。今はその習慣は廃れてしまつたが当時、この縫い子に選ばれることは、少女達の大変な名誉であり他人から羨やまれた。縫い子は殆ど皆その年の内に嫁として迎へられたからだ。縫い子の条件は、容姿端麗

であることは無論のこと女万般のことが優れてできることが必須であつた。そうして結婚していつた少女達が、全て幸福であつたかどうか解らない。町を去つて異国で家庭を持つた少女もいた。頭も良く、器量良しであつたから、普通なら約束された人生を送れたはずであるが、それが反つて禍となつて不幸にも亡くなつた少女もいたのである。

遠くから、この衣装を着たやさかたのめのみこと 八坂刀売命の人形を見た人は、一様に感嘆の声を上げた。柴の緑の中に衣装の紫が溶け込んで、緋色だけがくつきりと浮いて見えた。近くで見ると、柴の緑と衣の紫がはつきりと別な存在として理解できた。緋色と柴の緑は色彩的には、補色関係であるから、鋭い対比として人に意識させるはずなのに、人形の顔立ちもあつてか衣装は実に柔らかで穏やかに見えた。その際の紫は控えめに、緋色の後ろに隠れようとする。まるで緋色を、前に押し出そうとしていようだ。安心しきつて頼り切つた緋色は、紫の中ですすくくと育まれていようだ。紫の愛がそうさせているのだ。

石段を登つて上社にでるまえに、平助はもう一度鳥居を潜つた。出た場所は上社の側面である。石段の出口、社務所前

の藤棚を丁度真横から眺める位置にその鳥居があつた。この藤棚は、この界限では珍しく盛夏に咲く土用藤だつた。新道から上社正面にきて境内を眺めても、この石段出口の鳥居に殆どの者が気付かなかつた。

「宮崎さん！ 米持つてきたじ。」

神社裏手に回つて平助は、社務所のガラス戸を開けて中へ呼掛けた。返事は無かつた。

「宮崎さん 宮崎さん！」

平助は、かつて中に入ると、上框にリュックを下ろして外に出た。境内をぶらぶらしてれば神官の宮崎さんに会えると思つた。

宮崎さんは、上社十五代目の神官である。昔上社には神官も巫女も大勢いたが、今は神官三人に減り巫女は一人も居なかつた。ただ最近巫女は、アルバイトの少女を雇うのが通例であつた。宮崎さんは、神官のくせにペンネーム「御子柴三郎」名で小説なんぞも書いていて、諏訪の同人仲間では知られた存在だつた。神官だからといって、何も小説を書いてはいけないという理屈は無いが、坊さんが書いた週刊誌のくだらないエロ小説を読んだりとすると、神官の小説が気になるのだ。宮崎さんも官能小説を書くのだろうかと、飲んだ時何時か平助は聞いたことがある。

平助は、白い袴と薄青の亜麻布の衣服を着ている宮崎さんが好きだつた。神官姿の宮崎さんは、一人で飯を食っている宮崎さんだつた。宮崎さんは、四五歳にもなつて奥さんも居ない。だが、一向に独身であることに気にする風もない。平助の父親が何回見合いを進めても、何時も笑つて取り合いもしない。人の噂では、失恋して以来女を近づけないのだと言うが、平助は、それは嘘だと考える。それが証拠に神官の宮崎さんは、多分に女癖も悪く助平で、大いに生臭かつたからだ。米だつて本当は、買うことになつているのだが、中々金を払つてくれない。平助の父親は、神官長をしていた宮崎さんの御祖父さんにえらくお世話になつたとかで米代を一度も請求したことが無い。平助の父は、宮崎さんの書く小説を何時も最大級の賛辞で誉め上げた。諏訪から中央の文壇に殴りこみを掛ける人材だとも言つた。父と宮崎さんが呑んだ時に、そんな父の賛辞にお構いなしに、酔つぱらうと必ず花嫁人形の唄を歌う宮崎さんだつた。

《金襴緞子の帯締めながら・花嫁御寮
は何故泣くのだろう・・・赤い鹿の
子の振袖着てる・・・》

宮崎さんの一人扶持位の米なんて量も

しれていると平助は思つていたので、こ
うして五升の米を持つて、時々この石段
を登つてくるのが常であつた。なにより
も、平助は宮崎さんの話が面白かつたか
らだ。

「よおー。平助！」

「こんちわ！ご無沙汰で。」

「何時帰つてきた？」

「おととい。」

「お前の親父に聞いたら夏休みのバイ
トで帰つて来ねえずらなんて言つて
たに。」

「その積りだつたんだけど。」

「やっぱ諏訪は良すら。東京と違つて・・・」

「まあ、そう言うことだね。」

平助は、宮崎さんと交わす久し振りの
信州弁に育つた者だけが感じる親しみを
覚えた。

境内を掃除でもして来たのか、手に箒
と塵取を提げていた。そこに故郷に帰省
した時に見る何時もの宮崎さんが居た。
平助は宮崎さんと肩を並べて歩いた。

石段を上り詰めた上社境内の社務所前
に、この界限でも珍しい藤棚があつた。

通常藤は五月下旬までに咲くのが普通だ
が、ここの藤は七月八月の季節はずれの
盛夏に咲くので、「時じき藤」「夏藤」

「土用藤」とも呼ばれていた。熱帯アジア原産といわれ葉は厚く常緑で、濃い紫の花が上向きの円錐花序についでいた。蔓性の低木のマメ科の植物を藤棚に仕立てたのは、宮崎さんの御祖父さんだといふ。この夏藤、別名紫夏藤と言う種類で珍重され、地元婦人会の手で何時も手入れが行き届いていた。毎年、一見季節外れに思える夏藤を愛でる夏藤祭りが開催されるので、訪れる人も結構多かった。

「おまえ、でかくなつたなあ。」

「そりやそうせ、何時までも子供じゃあるめいし。」

「親父さんよりでけえずら。お前のお袋さん、でかかつたからなあ。」

宮崎さんに母親似と言われるのが幾分恥ずかしかつたが、確かにどちらかと言えれば平助は母親似だつた。

「ところで、宮崎さん米持つてきたじ。」

「すまん。親父さんによろしく。」

「そうか、そんなに学校は面白くないか。」

話題は、平助の大学のことに移つた。

平助はニヤリと笑いながら、背伸びして力説した。本当は、口で言うほど平助の大学生活がつまらなかつたわけではない。唯宮崎さんにそんな風に話すことで諏訪を離れて東京に行ったという、子供

じみた優越感を感じてみたかつただけかもしれない。

「大学には、シャンな女の子は居るか。」

「学校にかい？ 冗談じゃない、工学部だもん。女つ気なんか何にも無いぜ。」

「そうかおめえ工学部か。知らなかつた。てつきり、おふくる譲りの文学青年かと思つてたが・・・」

「もつとも、近くの女子大の寮に、仲間とストームを掛けにいったことはあるじ。」

「このいかさま工学士め！ 色気だけは一人前になりやがつてー」

手にした塵取を其処に置くと子供時代に打つたように、箒で宮崎さんは平助に打つて掛かつた。平助は笑いながら、身をかわずと宮崎さんの箒の刀を軽くいなした。宮崎さんと一緒に居ると、何故か急に諏訪に帰つてきた実感が湧いてきた。

宮崎さんは、藤棚の掃除をしていたのか塵取に紫色の花房が見えた。

「知つているよ。その男の子なら、よく知つてるよ。」

「知つてるだかい？」

社務所の宮崎さんは、きっぱりとした口調の後、回想するように暫し黙りこくつた。

「・・・」

「あの変な赤服の気の強そつな男の子。」

「気の強い？」

「ああ、地元の悪たれと喧嘩してたじ。」

「喧嘩つて、取っ組み合いか？」

「いいや、口喧嘩だ。五人を相手にだじ、宮崎さん！」

「そうか。」

「周りに、妖気が漂っているよつな・・・」

「妖気？ 妖気かこりや良いや！ お前上手いことを言うな。」

宮崎さんは突然、平助の形容に大口開けて笑つた。平助は、宮崎さんのその笑いの中に自嘲めいた寂しさを感じ取つた。

宮崎さんは、赤服の男の子の素性をすこし喋つたが、肝心な所へ来ると口籠つた。

宮崎さんのその口調に何処か投げやりな、然も語気鋭いものがあつた。平助は、赤服の男の子のことをもつと聞き質したかつたが、それ以上踏み込むと宮崎さんの秘密に触れそうな気がして聞くのも躊躇された。宮崎さんの表情に、何処か聞き出すことを拒む気配があつたからだ。

平助は、あの赤服の男の子と、白い神官姿の宮崎さんを一緒に想像した。男の子は夏藤の下で、一人赤い翼を生やして境内を飛び廻り、傍らでそれをじつと静観する宮崎さんがいる。宮崎さんが、小悪魔か猖狂熱の疫病神の庇護者として、珍しいその夏藤の下に立っている姿だつ

た。その藤棚の下には、何故かもう一人笑いながら男の子を見詰める端麗な女性の姿を想像していた。

平助は、その日宮崎さんからビールを呼ばれて家に帰った。

その日は午前中から暑かった。

季節はすでに緑滴る初夏を通り越して、スツカリ真夏の気配がした。

平助は、石段の冷気を尻に感じながら、本を読んでいた。石段は帰省した時の、平助の書斎兼昼寝の場所だった。夏の暑さは、高い葉末の空間に舞い、今日は下まで降りて来なかった。肌の上にべたりと張り付いても来なかった。蝉の声のみ賑やかだった。

平助がふと視線を上げると、この前と同じ石段の上方に緋色があつた。今度は眼鏡無しでも巫女と勘違いすることもなく、また赤服の男の子との再会だと直感できた。

喚声もなく、上から降るような金属的な呪文もないのだが、平助ははっとして自分の心臓が高鳴るのを感じた。見上げた石段の緑の向こうに、確かに同じ緋色が忽然と浮かび出たがどうやら二人連れだったからだ。平助が子供の頃にみた上社の祭りの緋の衣装、あのお船祭りの青

柴の中にみた八坂刀売命の人形がきていた緋の色だった。暗緑色の背景の中から一人の紫衣の女が男の子の手を引いて出て来た。平助は、口をぽかんと開けて放心のうちに二人を意識した。

薄紫色の日傘を差し、赤服の男の子が一人で石段を下りられるにも拘らず、石段で脚を動かす度に、女はちよいちよいと繫いだ片方の手を持ち上げるようにしていた。紫衣の女が横に居ることでもう、平助は、男の子に話かけられないような気がした。はたして猖狂熱の疫病神、小悪魔なのか、それとも毛唐とのあいの子に過ぎないのか……。もつと男の子の正体を知りたかったのだが……。

近づいてきた紫衣の女は、感嘆の言葉もない程、際立つて美しかった。なによりもその服装が洗練され、明らかに土地の者は被らない広幅で緑色の帽子に、首に巻いた白いジョーゼットのスカーフを風になびかせながら、ノースリーブの濃い紫のワンピースを無造作に着こなしていた。上背は幾分小柄だが、申し分のない気品を漂わせ、日本人としては珍しい眼窩の深い顔立ちで、ナイーブな髪の間が、木漏れ日に燃えるように輝いていた。男の子の切れ長の大きな眼は、その女の眼と酷似していた。平助にはその紫色の衣装を着た女は、母親であることは明らか

かなのだが、まるで紫夏藤の精霊のように思えた。ひよつとして八坂刀売命の化身なのかとも思えた。男の子の服と帽子の赤が、女のワンピースの藤色の紫に支えられ、石段の暗緑色を背景にして、二人の回りだけが、木漏れ日に映えてひと際鮮やかにオーラを発して輝いていた。

「よいしょ！ よいしょ！」

二人は、互いに声を掛け合いながら石段を下りてきた。平助は、あたかも崇高なもので眺めるように立ち上がった二人を迎えた。藤の精霊を眼前にして、女とまともに目が合わせられなかった。赤シャツと赤パンツは、この前観た時と同じ服装であつたが、今日のその男の子は加えて少女の被るような、赤い帽子を被っていた。でも男の子は穏やかな気を発散して、女が手を離れたら、翼を生やしてそのまま飛び去って行きそうに見えた。男の子は、少し首を斜めにして、気恥ずかしそうに平助を観た。男の子が平助に笑い掛けたと思つたのは、錯覚だったのであろうか。

平助は半ば放心のうちに緊張して、何となく物怪めく二人を神々しく見送った。平助の立っている位置から、数段下の石段迄いった時、男の子は寄り添う女を見上げて言った。

「おかあさま。」

そういうと、男の子は再び照れたように平助に顔を向け直した。其処には、強烈な妖気を発して駆け下った先日の子の面影はすっかり失せ、可愛いその草は母親に甘える極普通の男の子ように観えた。

「こないだの おにいちゃま。」

今度は、反応を確かめるように探るように男の子は、女の顔と平助を見比べた。平助は、思わず振り向いた藤の精霊のような女を拝むように深々と会釈をした。物怪めいた女が軽く頷いて会釈を返した。二人とも平助をみて笑ったように見えた。奇妙な二人連れは、平助の存在等全く意に介さず、そのままずんずん石段を下りて行き、忽然と姿が見えなくなった。

平助は、心の裡で

《こないだの、お兄ちゃま。》

と呟いてみた。

急に身体中がこそばゆくなって妙に嬉しかった。老綾杉の葉末から、蝉時雨が石段に降っていた。

以後黒澤平助が、この石段で妖気めく赤服の男の子と、藤の精霊のような母、奇妙な物怪母子二人連れの姿をみることは、二度と無かった。もちろん敢えてこ

の石段での出来事の一部始終を宮崎さんに報告し、母子のことを問い質すこともしなかった。平助は大学最後の帰省の折、石段を登り、「時じき藤(夏藤)」の藤棚の上社境内の社務所に宮崎さんを尋ねたことがあるが、東京で就職してからは、殆ど諏訪に戻ることをしなかった。

数年後、同人誌「諏訪湖 掲載の御子柴三郎作の小説「赤服の男の子」が、第十六回の北関東文芸家協会の最優秀作品に選ばれた、という知らせを諏訪の父から受けた。父から送られた、御子柴三郎のその作品を読んでみた。舞台は諏訪の御柱祭で私小説だった。

祭礼の衣装を縫う縫い子に選ばれた娘は、仏国の画家との子を残して亡くなるのだが、平助にはある意味、宮崎さんの妻帯しない理由が理解できた。前段から作品は、どろどろした深刻な男女の愛憎劇を描き、海外に飛ぶ謎解きになっていた。宮崎さんが酔うと必ず唄った童謡「花嫁人形」が、小説にも描かれていたので、上社十五代目神官をしていた宮崎さんの心境が痛い程良く分かった。

平助は、宮崎さんに心ばかりの祝いの品として、丸善でモンブラン製の太目の万年筆を購入して贈った。丸善の店員が、受賞祝いの文字を万年筆に彫ることを進めたので、「祝、時じき藤の宮崎さん受賞

記念」と彫ってもらった。

万葉集にある大伴家持の詩を思い出した。わがやどの時じき藤のめずらしく

今も見てしか妹が笑まひを

「祝、物怪めく時じき藤の下で受賞」

と本当は彫りたかったのだが止めた。

簡単な宮崎さんの礼状を勤め先で受理したがそれ以来、四十年後の今日まで、石段に現れた物怪母子に精気を吸い取られてか、宮崎さんの作品が中央文壇で、これと言った何かの賞を受けたという噂を、黒澤平助は一度も聞かなかった。でも、毎年夏がくる度に、社務所前で時期はずれに咲く、この「時じき藤」の藤棚の事を平助は想い出していた。

女性の老いや死を単独孤高の鋭い感性や情念で歌い上げ、物怪の霊を強く宿した俳人二橋鷹女の句に夏藤を詠んだ句がある。

夏藤やおんなは老ゆる日の下に・鷹女
平成十六年・甲申の年に、御柱祭が諏訪大社で盛大に実施された。きつと、多くの物怪の群れが甦ったに違いない。

了

参考文献

「御柱の話」 諏訪史談会編 蓼科書房
「藤なんでも百科 藤だより 藤つくし 藤つくり」 春日部市